

理学療法教育の新たなる挑戦—Outcome Based Education.

2 医学教育における outcome-based education (OBE) の影響

東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 大西 弘高

医学教育領域においては、米国卒後研修認証評価評議会 (ACGME) が1999年から Outcome Project を開始した頃から OBE が知られるようになった。全ての専門領域に共通したアウトカム領域が、①医学知識、②患者ケア、③対人コミュニケーション、④診療に基づく学習と改善、⑤プロフェッショナリズム、⑥システムに基づく診療の6つで示され、これらの領域に対する評価手法も示されるに至った。カナダでは1996年に出されたアウトカムモデルがよく知られているし、英国では Tomorrow's Doctor で示された教育目標が同様の構造をしている。

OBE とは、専門職の要件を満たすような人材が輩出されているかに関する質管理の考え方に基づいた教育システムの新たな基盤理論と言えるだろう。まずは、アウトカムや教育目標によって専門職に求められている能力が明示され、教育システム全体にそれらが行き渡る必要がある。また、それらの目標が達成できるよう学習機会があり、状況に応じて指導やフィードバックがなされる必

要がある。さらに、修了時に必要な能力を備えているかに関し、妥当な評価手法で評価する必要がある。

我が国では、医学部分野別認証評価が本格化し始めた2012~13年頃から OBE に関する議論が活発になった。それは、認証評価のプロセスが OBE の考えと基本的に合致しており、OBE への理解や取り組みなしに認証評価を受審することが困難であることによる。

しかし、認証評価基準と照らし合わせると、特に参加型臨床実習では様々な点で OBE の実施が難しいことを思い知らされる。まずはコンピテンシーを言語化することが簡単ではない、また、現場では患者安全の問題が絡んで、学生が診療責任を高めることが難しい。さらに評価に関しては Work-based assessment が不可欠だが、誰がどのように行うのかについて具体策が立ちにくい。

このように実施段階では医学教育領域での OBE はまだまだだが、今後の改善の方向性は見えてきたという段階である。

理学療法教育の新たなる挑戦—Outcome Based Education.

3 運動器理学療法学における学習成果基盤型教育の考え方

埼玉医科大学保健医療学部理学療法学科 赤坂 清和

近年、医師や薬剤師の養成教育において学習成果基盤型教育 (Outcome-Based Education) による取り組みとその成果が報告されるようになり、理学療法士養成教育においても検討対象となってきている。医師養成教育における学習成果基盤型教育では、医学教育の質を保証、順次性のある一貫カリキュラムの作成、学習項目の重複と欠落の改善、教育の継続性が担保できるなどの利点が挙げられ、卒業目標を達成できるように1年次から順次性のある学習目標を設定するラセン型カリキュラムを編成することが推奨されている (Harden 1999)。

理学療法士養成教育における運動器理学療法学として、学習成果基盤型教育による取り組みを考えると、どのような方略が最

善であろうか。有能な運動器理学療法士となるためには、運動器理学療法学に関連する講義や演習、臨床実習、そして生涯学習のすべてを包括的に捉え、多面的に目標を設定し、さらに段階的に水準を設定する必要がある。理学療法士養成教育の目標は、卒業時の学生のコンピテンシーであるため、学生として実践すべき (水準1)、スーパーバイザーの監視下で模倣すべき (水準2)、そして見学に留めるべき (水準3)、という3つの水準を明確にする必要がある。

今回のシンポジウムでは、著者の考える運動器理学療法学における具体的な目標と3つの水準を提示することを通して、シンポジストや会場の先生と理学療法士養成教育における学習成果基盤型教育について理解を深めることを目標としたい。